川鶴天網船初編
金松堂上梓
福壽
上
中
下

福寿
上

A542
1

川柳

天網船

初編上之巻

彩霞園柳香著
梅堂国貞画
金松堂梓

48-8422

王政の民皷腹し浴し維新の寛典四海に普き明治聖代の太平楽語滑稽と旨とし諧謔を根とする小冊子と雖も須く児童をして文明進歩の導くの楷梯たらざるべからず況んや勧善懲悪を一句一章に綴る新聞記者の力まさに大なりとなすべし硯友彩霞園子夙に婦女小童に教訓を以て自ら任とし曩に小説稗史を著述事数回大人識者の嘲笑を招らんと之を中止せん事を勧むる者あれども子い断乎として動ろも高尚なる議論に学者の常余い兒童をして善道に入らしむるを以て業とせりと此度また天網船を著し巻中遊冶郎放蕩の子弟を懲罰し終に天網の疎なるを知しめ一読忽地性の豁るるに復さしむるなり快哉々々偶々子が寓居を訪ふの日板元序詞を需むるの際なれば柳香子に代りて鉛筆を採り出故題言によせて書と弱り

明治十五稔二月中の日

在東京　田中沙汀

法律学士 吉田直
川鳥省郎 后強盗千鳥省一

省一郎の妻お柳

川衡天網船前編卷之上

彩霞園柳香著

小惡よ門戸と開けば大惡次いで出づとも是ある哉云壯年血氣の
家酒色のことあるよ身を慎まず汚名を千載よ流さい未だ汲て孫
ーとよるよ思ふ思ふを慕よ素封豪農の家よ生まれ父母兄弟
汚ふ所を恥ずるざるべからざるべし白浪黨流の群よ入り
天網実を逃るゝとえん繁害の津陽瑞よ者被さ是貴重の
自由と剥奪され須よつるゞ信守の若役よ数年を困され
て父祖の家名を世よ穢を最も不孝の・所為漢なり今至廢まを
紀載ーく青年輩の懲戒よ備ふる一結い乘系より僅よ距里を
隔つる清正藩下武義生ふ是主郡塩穢村二十ヒ番地ふ二百石

つゞき 余の田地とも西有と舊幕の時代より二十余ヶ村の大庄屋と勤めたる家柄なり 弟に富之弟といふる者あり 開り長男の有一郎（明治十五年二十の年）に新る大家の家より主人その上一人ありのみ主人云ふ成長なー明治七年の妻演主人一人弟の男ゆいあつて主人と勉強ない

▲少しもなく教育情情と家を持ちー△

豪ち田舎子主人

銀

省

風俗の美人男子由名海乱女の者一郎ホ

◐京ろーグ或円我家へ出入なる根義といふる大官職と連主

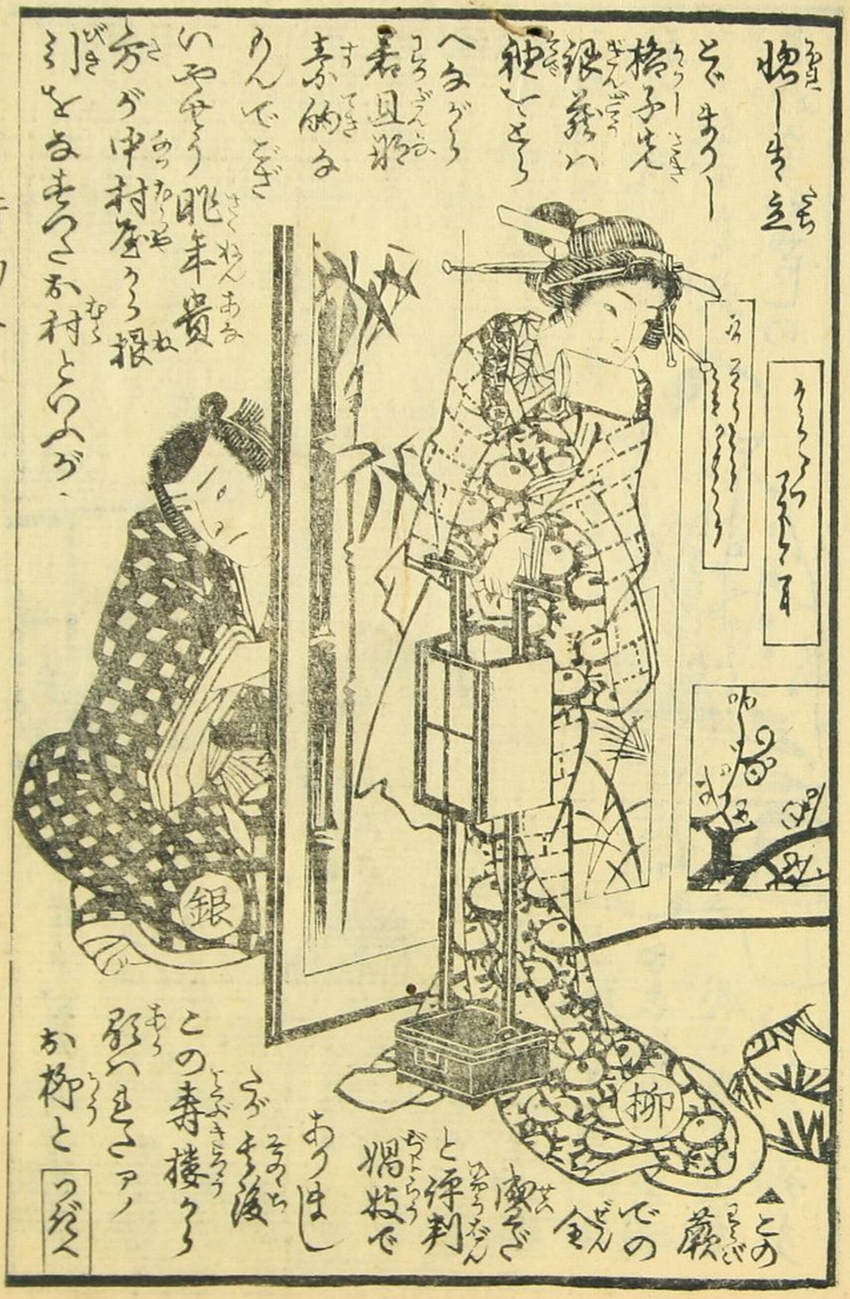
柳

つゞき

程迄き厥弥
まで新むれ ぬり
ふ不図傍を
猫数舗と看ると
年十七八の
猫数ゞ表とえ
おゞう前一帝と
新看あへせまつ
う笑ふ笑く
ーさこゞる斗
りの型数よ
省一帝もえ

ゞ
ーー
格子先
銀義ハ
紙とゞ
へゞゞ
表具屏
素飾ゞ
りんでゞぎ
いやゞう眺年貴
方ゞ中村屋うゞ根
引をゞまつさゞ村とのゞゞ
つゞく

▲この厥
での金
摩ゞ
と俳判
猫数で
あつは
ゞ
この寿楼ゞ
弱へまさァノ
お柳と
つゞく

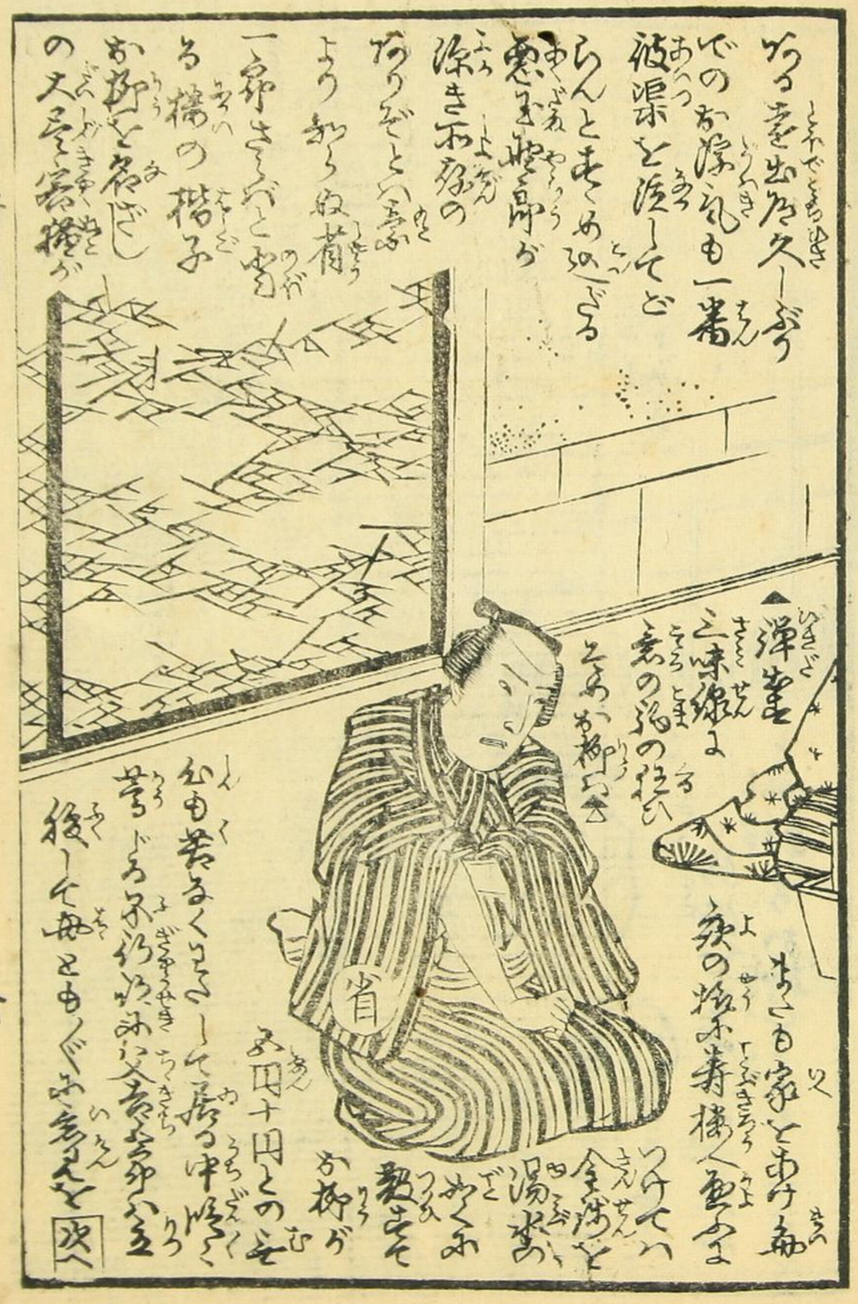


つぎ いよ
湯殿へ行
でも糸の
吉糸で或
大籠の湯
殿みを長く
仕へて子繁と云う縁
殺あり押て云う吉安
よ安泊へ移るとは武
縁での浴行ッ殺
ナント今日こそ祝
旦那様のお出し

▲年とそ十八番根津西川
うち吉糸の
◐数文
く溜り
み場糸
うし移
へ光いて
来て石孤
今有へ銭中情丈筋
の銀彩うの指揮
四五勘の外の侍
遇よ者一番の麦
中みの色より

なる妻を出て久しぶり
でのお深礼も一番
彼渠と泣しそど
らんとまをめ知ぐる
悪を殺昇が
深き不孝の
なりぞとい言
ようあらぬ者
一帰さべと雪
る橋の格子
お野と名ぢし
の大を宿橋が

▲洋堂
こ味線よ
妻の猫の狂ひ
とあお都合本



生き日家と申す命
夜の孫小寿橋へ重ね
つけて
金沢と
湯殿の
やくみ
敷ちそ
お柳が
公も若るくさして居る中降
苦ろ不行ふ父吉左衛八王
後しに母ともぐふ言えを
次へ

つき　ちさのでその面かい達は
で居さもお柳の方へ行家
業のしよ仏ばまよひちさ羅
がうひとをとめさ板母のおもつが
仏配して弟富の女代分手よ
吟舟寿撰人掛金せーこ人お柳
と根くらのお淡させーみ
高門義の照枝の中みて
お柳のよう出る者の
るの私ー居の金面女
女殺ー亀るかでい
ひとども農業の

一文出くるよで首一家も
母親が意あのさけよ
歳をして去で
らくお柳へ
女代

お柳は方へ
頭の
てあつ
ろ分母
までの去へ
沙法とせぞふへ重れね
と母親よりお柳と文出くると

板障い背と
遠ひ彼見云長
今の品世分の代
金百円十円あくべ
お淡いくーせうと
揚主の張ーふ
女代い去抜
早迷この
ものもとと
おもつふ去
百円十円よ
てお柳と

母

張せーふ
先須百

三十円うて
女文てやつ
アノおもうとまざ
一月もこ兄ねち
厚ざと
ゆくーく
揚ざと
揚ち
れ
ち
後の

つゞき

放蕩
極び我まゝ
気まゝと呼る
中ろてまゝ
その媚妓と
交出して女
房よさまる
めでい仕
ての外ぐ
のうらせる
女の子い見
抱もあいろけ

柳

省

▲小粋みゝしが表そとと
きめる長さを着一帝ハ
脆生でお
柳が

書入
溺愛
えぐ
おろうゆ父母ろへ甘く

後い決して我まゝと
言ぬやうく戒め
て垂がよいと楽ド
さよういろむず易
い父が解る
俗しふろこび
恵よお柳と
奥い見ゝく前一帝の
女房よひろめいまさがお柳
が乳ぢ胸み一のろなるる
ろ見び保物ろうよ
者一帝へ行の卒▲

▲あ人ら
別よ
ろ
病奥
や前
先の扶料
使ろで▲

云えで南年の冬歳
孫ろて柳恵を使ろと
購ろひのとあこへ
お柳とうつり
俗しふ扶
料使我
たゞめろる
ゞこれと
お柳と
恨義ゞ傑
金せる係計
ろて升ゆち

つゞき

柳ぢ義孫へめ
塚系ようの鈔帯しるる
めとの銀義と系い
中世系寿横人出さる
後も翼毛の延さる客さん
なるあら甘くたゝしん分
交させ分易まるつく銀
義と構密とする貝塚さ

▲交ちうしぢ

▲うんさの
なるを耳よ
あ脱系
の意う
そまさ
るく
探れへ
我分
の上々
あるまで

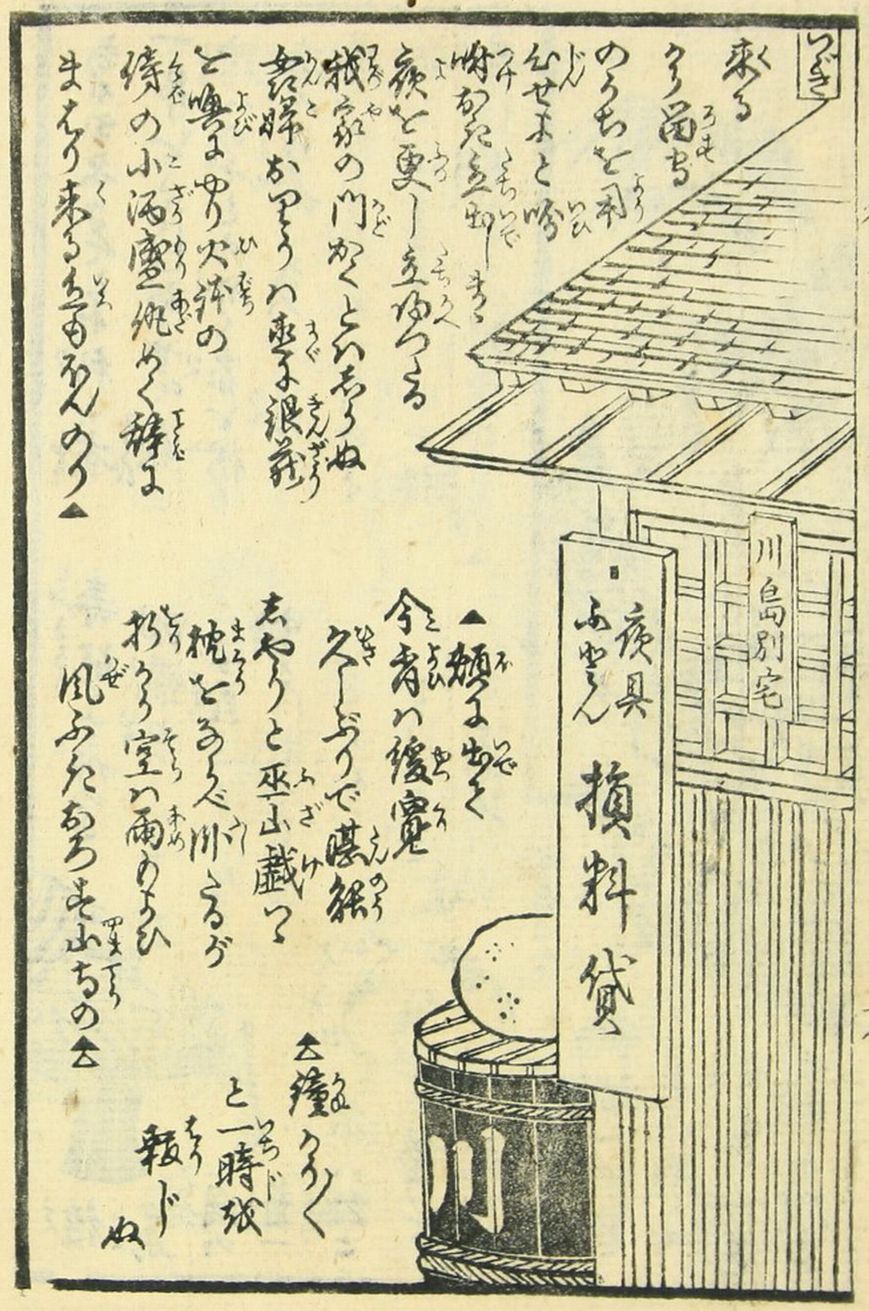
ある日系さそとそ形も者
一弟とさしあせて顔
鏡へのぞきの中く家と偽り
表人位義まるつる後い
者一弟がお宅へ出うみさ
宅まお存ぢざる疑い脱交銀
義と戦入まて楽むとの▲

寿横まと居てさ
強構密しても
銀義とまけなる
中とい者一弟も
いさ弓ぶづ
ざしぢを
ぢ人が敵

ことと△

一國の者一
鯉と
弟い赫と
帯うて
成日の
黄昏場
鍋村へ弟も
とてお柳ま
今青い本宅
ふ源く

つゞく



つき
来る
ゝり屋ち
のうちを利
ゝせよと吟
味なる五郎
疾と更し立ゆつる
城家の門かくとゝちうぬ
者歸かうつ恵よ浪義
と呼よゆり次評の
侍の小酒屋紙ゆく稼よ
まゝり来るちまるゝんのう▲

▲頻よ出く
今青い後寛
ゝしぶりで暖紙
去やうと巫山戯て
枕とあゝ川ゝるゞ
打ゝう室い雨のゝひ
風ふたあろ来山ちの△

△繼ゝうく
と一時紙
報ゞぬ

東京書三編
錦隅田暁
堂四枚西
暁心三伝
大尾
東京書三編
国貞東京名所
錦堂四枚西
名所澤遺詩
大尾
東京書三編
東京名所
錦堂四枚西
八編
東京名所廻春秋
大尾
東京書三編
招蘭氏傳奇文貳
錦堂四枚西
夜嵐
大尾
地本
錦繪問屋
文
010190514329

金松堂上梓
中

A542
2

48-8423

川獺天網船前編巻之中

彩霞園柳香著

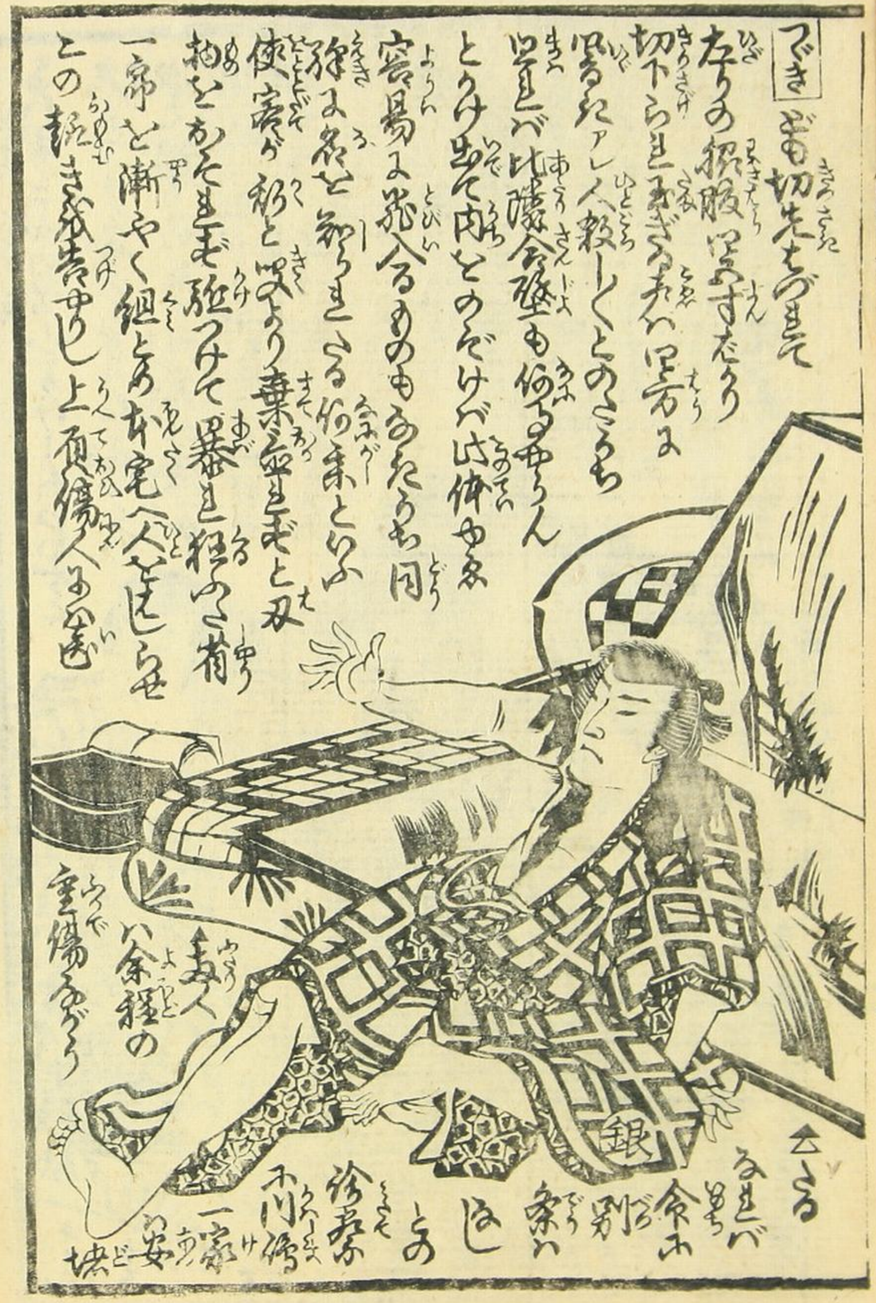
徳とも云ふべき文濃帰い白川筋ふるの様入なるうるさひ業ッたる
者一帝い今青年家へ行といふよりうてひまどりうえ一途中の
家ろて偽者ー出及庵下のかさだをなくせ天水摘ま[illegible]

つぎ　丈あがりて丸
窓より覗けば内ハ
不のふくき行燈を
ぐり反射よりくるる屏風のう

▲あげ一出双
庭丁老切つく
ゝべ右の板より
有さまを深
く切ゝ
ゝ

▲例
ろ
ゝ
ゝ
ゝ

夫男と女の弟とりけーたらわざと
者をーホ義の者ーの悪ゝ
奴と怒りのきゝ丸窓の障子
破りあらう矢を引きけさ
動くなと跳りゝる拍子
とゝと鋭くかりうより
森だけ眼の銀義ハ
ウス盗賊めと立向のと
アレ且狙ざと引尚るか
りうの紫と肖一弟いを
多とそゝ人てゝ引みもゝ見られ
ホ殘き銀義が逃ゝまるとゝり▲


つぎ
銀

柳
省

できなんぞ運よく通る時
なるべきの世とそ省一命
腕ッくりよ命の寸ち
今度の寸ち今年こそ
五流よ切り切るろ
一六勝負をせや
あるねと絶と
大膳不欲の
様も省一命いかどろ
ものこそ世の屋むところ
疾く金投まるがいと待
なるとあ祝ゲ紙と吹より作天

▲強ぎもみく
ひ一件へ
生涯
なるも
省一命
へ見
ちして
成ど
男と磨
くと使
宿とへ
ほるへ酒ち

▲去祝の表
電なるのと後
仏素ち屋力ろく

そそんな強ぎを素出しこへ
先祖へ対して恥ぬこと
ちさわ素よ彩を込
那の銀差く三十円の
金とをへて長
ろのしろへ
こる▲

▲糸の色と塗る
悪くあの
の家
花如
拾ひ
麻
布
ち
濃と使ふを襲
七ア社会み立
交りて考ふの
月の紙花びこそ
面白ろと

つゞき

千浪の形状も
三人等の美種の
かゝるハメクの後ろ
玉ゑ多月代の寥
対姿 花如鋪出
入とまる中ふ手如
のふ多彼如の配下
へ金で面る兄イ操
桃月今日ま毛長且於
と云見さ男ゞ兄ー
とう祝多ゞで云
るとよい

▲うち丈釈
も紀と関
知つてゆて
の外よと
言見い
ま毛ども毫も
耳ゑ入見ぜーと
捕の蓮ふ丈
交り寄とう
偏とうからも
ゑ丈その玉ゑ毛平晩
みその紀の耳ゑ入し

△八十日の

▲ふゝ
ゑ

ゑ明治六年の十月
中旬或村ゑ者う
との社舎ゞ猪
負と寄さ
宮中へ巡査
猪俣ゞ潜ゞ
ま一月捕縛ま
ゑつるゑ
ちゑらべの未
省一帝も猪
奥の鼠ハ
逃ま ゞ〳〵△

懲役を申ー
つゑら丈義ま
せーゆ家川高
一家の毛殺き
ハ月もゆそられ
ねゑつさ多
ゑりーゞその
巣ゑのゑハ
引ゑ久さ
省一帝ハ
その役中
も

さぎ 兎

▲なるほど兎で出ようとむかまへ
いきさまの一文字をしてべ行の処へ進ても
思ひ探び
いと出来
まつて△
角ゐ
要さ
るの女
策ごと我
身ゐとの
安婆へ出
さるう一
仕事い
ぬをみうぬと
△軍曹の兎と
動ぬ茅の
なる
軍曹の
抽斗中
少果
しく
金色
の
しと
その
深よ
疾く

四土年の一月
満れまして父
去る弟方へ
ら渡さ
ゐうく改心の
動静へるれ
ど今度い父
ど厳〜〜して
宮易ゐ外へも
出さぬゆぞ
その窮屈さ
ゐ堪るよ深ゲ▲
▲なると独ゐみ出●
●ゐさ
今考ぞ天の
ふへと舟ゲ便更△
川村の
竹柴方
法の
迷出ゐ金
とゐもゐろゐ
川島一家ゐて者
一弟の家出
つぐ
引攫へ
かゐて開
意ゐこら
へ衣類
のつこを
提携て
源を
こま

つゞき

ちゞろ
きを
恵み
人我
ほう方み
出ーやり
索せど
さゝみ涼読
も和ねべ
ぶりの中
ふも父母ハ△

●はまて出家
ー湯汲ゞオヤ
お茶はと声ゝけ
らをビクリとしる
省一郎ゞよくく
看をべとれぞ
はゝ和嚴孫ゝ
憂くゝ孫ひ果ハ
女房よ分文ー又

省

×この若ハ
後家
の家
う再
度の
動ゝ氏
茶ハ
名と
小松
とと
いと

△来をあん
ゝる恩愛の
意想ハゝも和
らぬゝハ△

△歯痛車とらて
ゞせく板橋孫ちで拉
させて母孫の貸座敷
彩喪ハへなゞー山二階の●

吉

又ゝゝも家内の
ぶゝゞ出来義
て離縁と
ゝる中村
様のゝしゝと
云る湯汲
ゆゝとゝハ
不ゝ歳と
省一郎ハゝ
ゝとまぐふ
納得ゝて
動静をきゝべ×

玉ひゝ
ゝる
和孫
も青ゝ
ゝと紅
ゝ深
いゝハきゝ
ても乳ゞ
ゝる焼
燃杉の
湯涼と

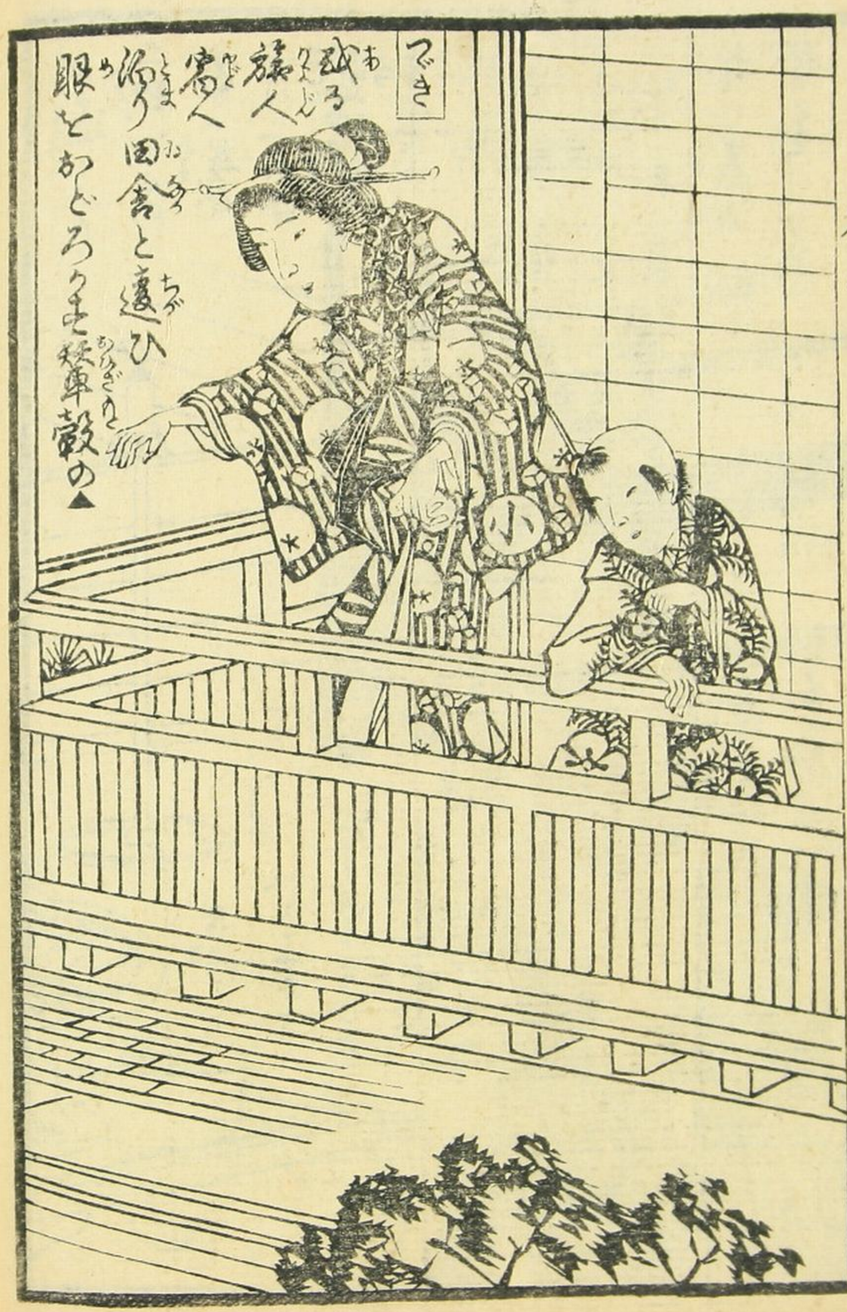
つゞく

つぎ 笑りも
涙のまくらの
きぬぐも
よひたとも
ちまきよ
一日ねンで
ゆくうと
年丈と年間
代りの大さへ

▲ふう きろく 当日の
ちまき
紫象へ
出ーゞ行
知とさへ ▲

ぎ逆く二月
二晩とこの
家よ探び
二月二月ふ
板橋弥を
もらぐ
送り出
さる二階
うるわ松
う拍ぐ女
練の罪名
祈りをさ紙 ▲

▲行く べき家とそ
ゆくざる分やを
年丈が来
▲ふう 親主ふ出入と
まる上亜
愛心路
重の つぎ



▲眼ぐひよ者一帝も仏
尊ぶ毎日平くと深
連歩行の魅物中
上世より屋さうぬ湯
魚天神へ糸流して地
内とそこ代処歩行ちち
者と命ぐ〜揚弓湯
ちりあよンあさいあチョイと
貴公と口屋の嘶りふ
有一帝も真よ入り福寿
と云る揚弓湯へ立寄る
姿とろるようもらく入りやい△

△ちゃ〜
サアあ方へ

おなぐりあさい
と二三人の女
が元巻元お菓
を吸つみ

地本錦繪問屋

高橋阿傳夜叉譚

國定忠治

錦隅田曙

格蘭氏傳倭文賞

川鶴天網船
初編
菊外
川柳
他者柳意を人
下

A542
3

48-8424

川鵜天網船 前編巻之下

彩霞園柳香著

是よりして鵜一羽を日〻小鵜毒の変人通ひ田舎者よと伝せる故為り服汁る素代と與ふるのこゝろかゝるを連て今日ハ芝居翌日ハ玉子の紅葉狩と連歩行うち重ねのとゝり

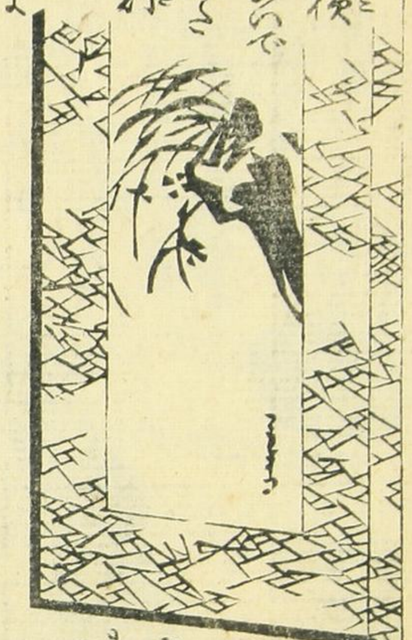
つゞく

ん上
常り外
ん上
十駄
省

み

つぎ 横

▲みなる
謎の下紐の
のとうり



▲素人と遠ふ座
敷の元日
仮屋いる待
遇よ省一帝ハ
意のうちふふつるふ
源くかりひとりみ尚疾ハ

りへおてんを
藝妓でどざ
いまを無表
みいちやンう
貴下のる
物けら見そ
だろうう
生そよ今見
どつさう
お茶後ま
さんとそう
さぬ數云も▲

ふ多ふ
ゆうハ
ちれど
おみるう
看見びまさ一度
ま寸る係数と
なのみ
みぞ
羽青
まぐふ奥
十ウう母よ
やりて走とみく▲

あいとうこと
のこをてド、一
よ解さ返
事の凡洋ハ
省帝もとう
特しくと思うう
何処で限
恵まみ
迷惑ちぐ
らか出で
ふいうと
故

つゞき

はてゝ
おつるい
胸みさと
お軽
ぐでおくれ
ぐ緒みと
ちち
遠ざちて
遠ざの
家
成行
金人
沖
迎
尾
小
弦
糸ふへ
▲さが
おとゝ
と遠ひ
糸の
屋く
の前
おそ
の前
おそ
の後
おそ
の方
ふ
目み

省

▲爆ちゝ
ちゝ
ちゝ
朝
ぐ
ぐ
妻
ぐ
ぐ
ぐ

つゞき

△茶碗ざけ
みれへゲットリ引
うみて酒よまー
なる焼うの新こと
茶豆のまく
あて花ひど
後沽今の門
ひとといとかう
くしく曳
あみてどめん
おさへと云
みぐく突然

しも乳附ね
省一帝小ふる
と絹せー結
金茶屋へ送
入るとこれ亦
亟むふの菓子屋の客よ
五人さ入用もあり菓
子などを購め須臾
動辞ちうぐひしみ
形と知りせやつる
りの程あく小ふるが後家よ
送入ると考るようこあらばこそ

▲亟さ面白へ
二階へうみ上
るゆぞ
と絹せー結
金茶屋へ送
入るとこれ亦
亟むふの菓子屋の客よ
五人さ入用もあり菓
子などを購め須臾
動辞ちうぐひしみ
形と知りせやつる
りの程あく小ふるが後家よ
送入ると考るようこあらばこそ

▲亟さ面白へ
二階へうみ上
るゆぞ
と絹せー結
金茶屋へ送
入るとこれ亦
亟むふの菓子屋の客よ
五人さ入用もあり菓
子などを購め須臾
動辞ちうぐひしみ
形と知りせやつる
りの程あく小ふるが後家よ
送入ると考るようこあらばこそ

してアレヨと
いふうちかこる
い二階で一富の
後かひ〜元日
さ屋風とひた
のくすこびうち出

次へ

つゞき

あ人が毛どけものゝ姿を着るよりあゝ濃らぞ地獄女めとらひなぐらう枕とゝてあげつけんとさも苦あゝゝ空あめふつるも素より省一帝も仰矢あせーゞ底でつけゝ跡の

▲茂家の紙書はじめ●

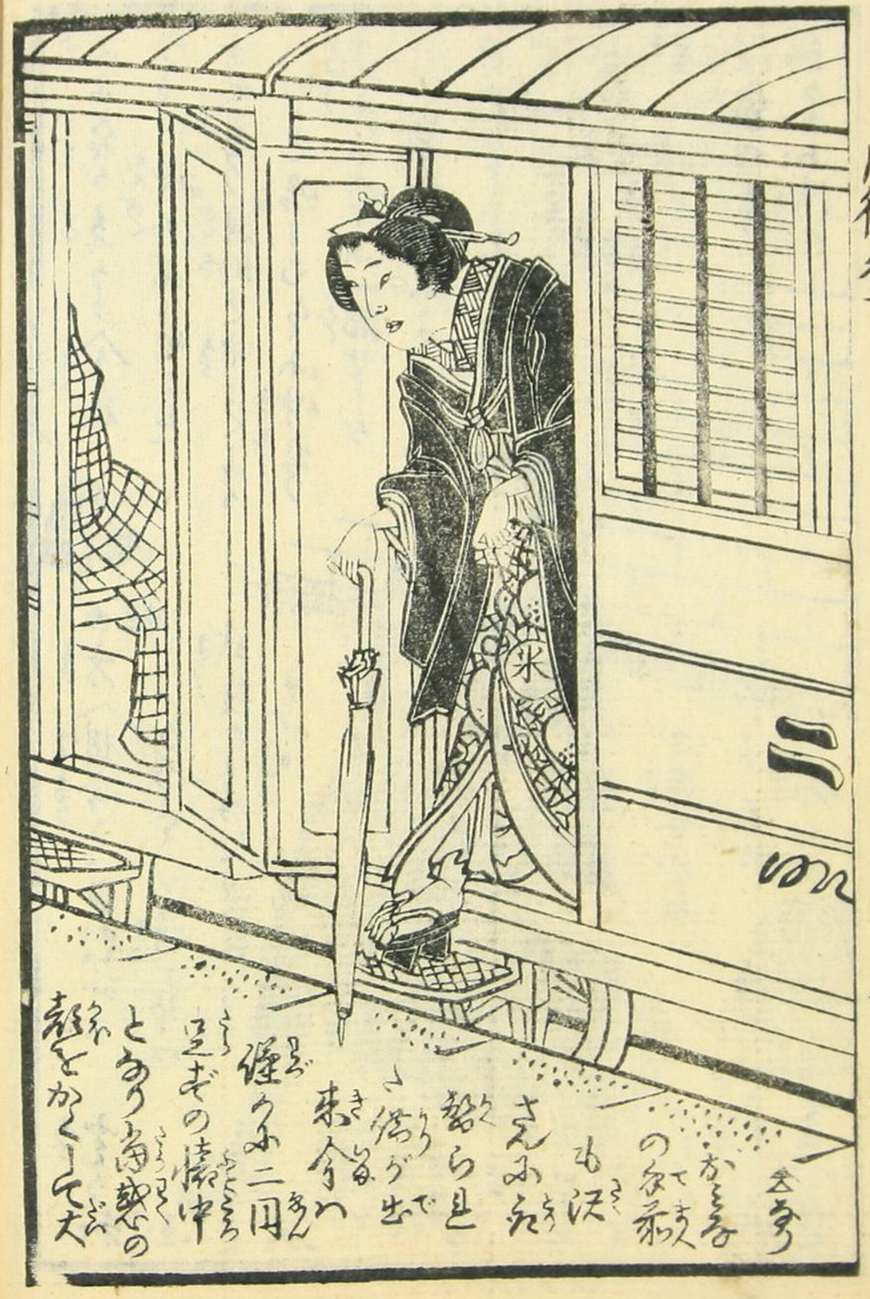
強ぎとゝるとかみをと笑とらぐゝ面めふつるを疾く通しやりて極ひ引まてる猴姫のかゝるとゝ粥やくあぐゝ兵衛ゝよ金く吾ゞ悪くつさゞ白後決して小鳥ゝゝ出構をせぬと拵ゝ云も女とたゝゝ赤い得ゝの衣ゝ▲

▲腰さ男ふ言ゞぐと
俺らまてゝゝ
でも焼りもあうねゞぐ
くとあゝぐる眼ゝと▲

●あ
一帝
の衣
あるとゝ
つゞく

つゞき

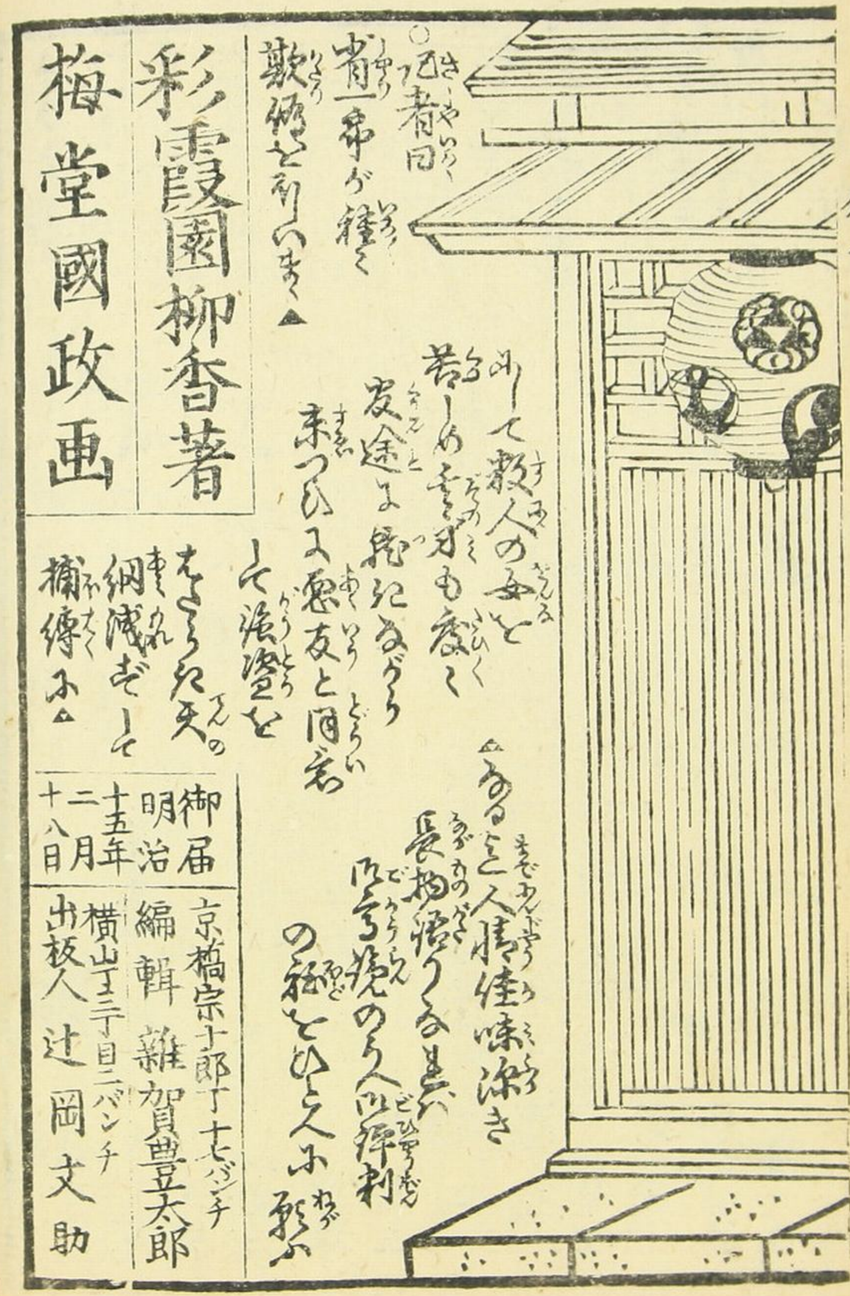
つゞく



つぎ

ぶみ紙の
家の捨ち
い孫さま
大ぶ
文字情の和
省
▲捨ンで
ぬうと後地
でも大八情の
捨の佐和ふる
別深ふ
追ふ情中へ淋
文字情の和
紙幣の同
出して
下ぶ
るぶ

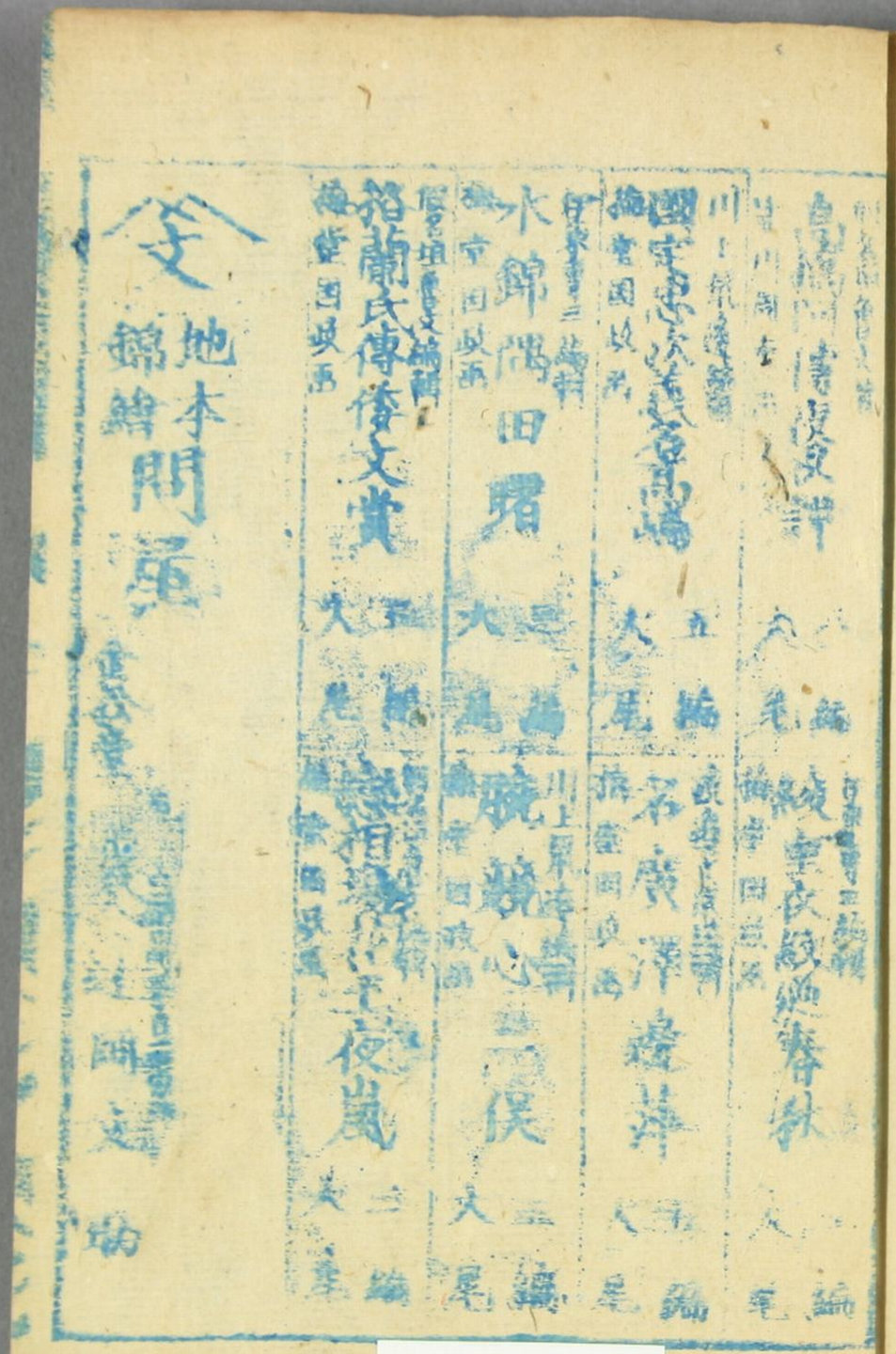
つづき
佐



彩霞園柳香著
梅堂國政画

御届
明治十五年二月十八日

京橋宗十郎丁十七バンチ
編輯 雜賀豊太郎
横山壹丁目三バンチ
出板人 辻岡文助



010190514345

仏多久雪の綱松

初編

柳亭種彦著

春堂国政画

辻文

上梓